

本校現職教育の全体構想とその実践について

——— 特に個人研究を中心として ———

足利市立西小学校

1. 現職教育の「全体構想」確定にあたって

教職員が、それぞれの立場でかかえている課題には様々なものがある。現職教育にこれらの課題をすべて取り上げることは不可能である。だからといって、現職教育に対する多様なニーズを整理したうえでその内容を決め、年間計画に位置づけて実施するだけでは弱い。

現職教育は、教師の研修を組織化して行うものであると同時に、学校教育目標具現のための一つの手だてでもあると考えるからである。したがって、現職教育の立案にあたっては、学校経営の基本方針に基づきその年度の努力点にアプローチするものでなくてはならない。

そのために、まず、本校における本年度の努力点を明らかにしておく必要がある。

〔本年度の努力点〕

- ・ 総合教育計画の策定と全教職員の経営参加をはかる。
 - ・ 教育計画の見直しと総合教育計画の策定
 - ・ 計画重点化による共通理解の深化
 - ・ 全教職員による「実践試案」の作成
- ・ 実感に根ざした教育活動を強化する。
 - ・ 一人ひとりの子どもが「成就感」を味わい「季節感」を深める教育活動の推進
 - ・ 学習活動圏の拡大
- ・ 西小学校教育改善の基本的視点を設定する。
 - ・ 一人ひとりの子どもを認める。
 - ・ 一人ひとりの子どもに学習を成立させる。
 - ・ 一人ひとりの子どもに責任ある行動をとらせる。
 - ・ 同和教育の推進に努める。
 - ・ 道徳教育の地域協同推進に努める。

また、本校では、教育計画の中で本校教育改善の方向を明らかにしたが、このことも現職教育計画立案の上でおさえておかなければならないものと考えた。

〔本校における教育改善の方向〕

- ・ 教職員の教育観の変容に関する視点について
——— 教育計画（目標具現の見取図）の策定と実践を通して ———
 - ・ 教育活動の総体を読みとる力の育成
 - ・ 「実践試案」の作成 ——— 一人ひとりの教職員の経営参加 ———
 - ・ 生涯教育への指向 ——— 地域教育計画への展望 ———
- ・ 教育活動（方法）改善に関する視点について
「実感に根ざした教育」実現の全体構想 ——— 学習活動圏の拡大を中心として ———
 - ・ 学習活動圏（学校を中心として往復90分以内の活動圏）拡大の背景

「体験」(実感)による全教育活動の見直し

「間接経験」から「直接経験」へ——子どもの体験的活動の重視——

- 学習活動圏拡大の意図

「自然」への接近(季節感を深める教育)——豊かな人間性育成の大前提——

多様な人間関係づくり

教育活動の質的転換

以上のことから、現職教育計画立案にあたり、まず「現職教育全体構想」を確定し、それぞれの内容の関連を明らかにした。(昭和55年度「現職教育全体構想」→別記)

このことは、本校教育改善の方向である「教育活動の総体を読み取る力の育成」にかかわる。つまり、全体と部分、部分と全体との脈絡を確実におさえていくたしかな構想力を、自らの実践を通して強化していかなければならないと考えた一つの実践場面であると言える。個々の計画(研修)が、どんなこととかかわりあっているのかをつかむために、この全体構想を常に念頭において実践していかなければならないという必要感から生み出されたものである。

2. 現職教育全体構想について

(1) 学校課題

全体構想確定にあたっては、まず、中核に何をもってくるかが問題となる。言いかえれば、学校課題を何にするかということである。

この課題設定にあたっては、まず、経営の方針、努力点、教育改善の方向、前年度までの積み上げ、さらには、教職員のもつ課題等を話し合い、全職員共通理解の上に立って設定しなければならない。このようなことから、昭和55年度は、学校課題を次のように設定した。

◇学校課題「一人ひとりの子どもに学び方を身につけさせる学習指導のあり方」

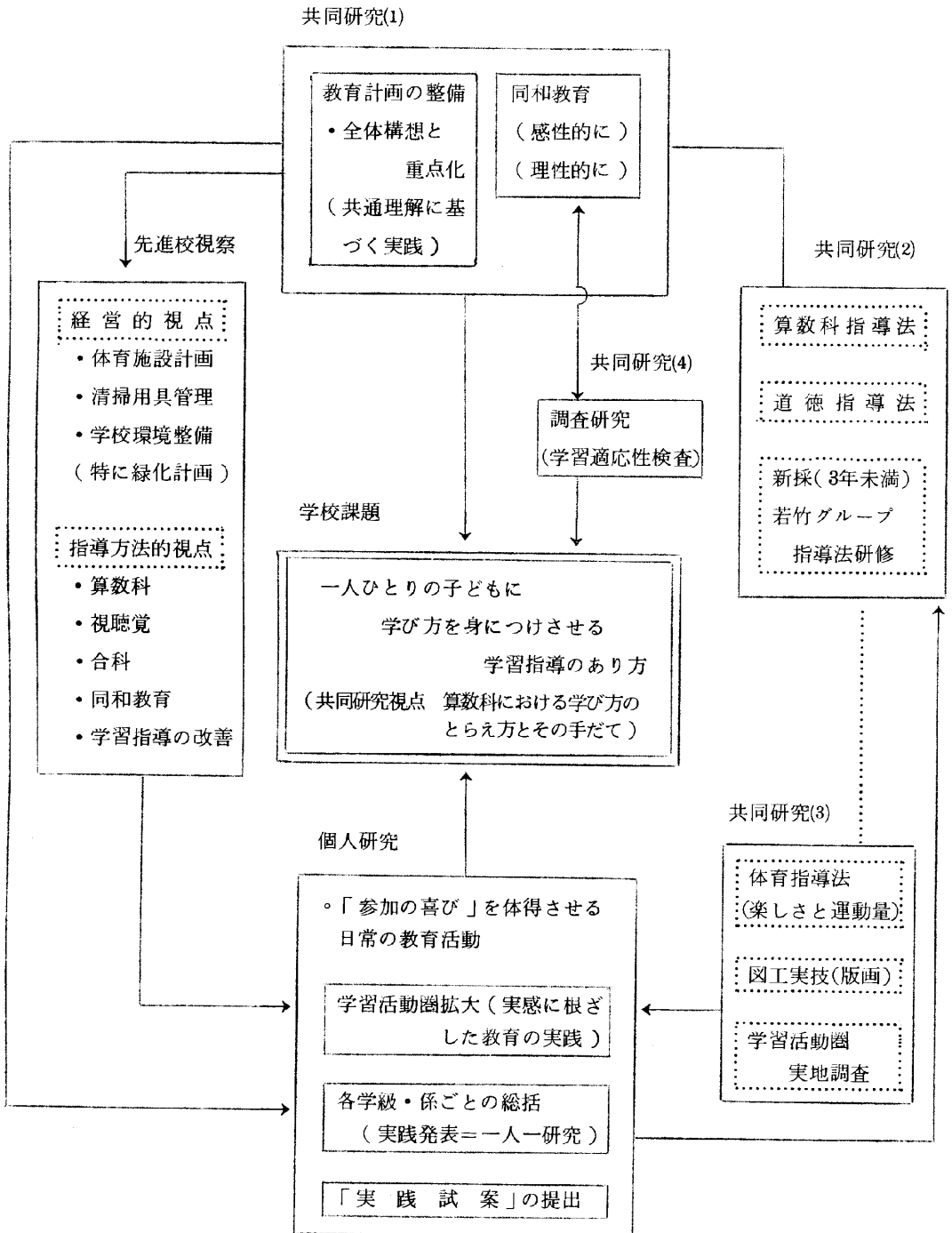
教育目標「やりぬく力・あたたかい心」を指向した基本的視点は、ひとりひとりの児童の「参加」にある。つまり、落ちこぼれをつくらないことであり、積極的な意欲づけによって疎外感を除去し、充実した学校生活をおくらせることにある。

現職教育では、これを受けて、学校課題に「一人一人の子どもに学び方を身につけさせる学習指導のあり方」をとりあげた。昭和54年度は、その中から、特に算数科における「つまづきの発見」に努めてきたが、残された問題を整理する中で「つまづきの発見」と「学び方」がどうかかわるのかが特に議論された。ややもすると、「つまづきの発見」が理解や技能中心となり、そのつまづきの対策が教える側のものとなり、自ら学ぶ学習活動となる、子どもの主体性を育てる方向をとるものばかりとは言えなかったようである。「ゆとりと充実」を旨とする新しい教育課程でねらう教科指導をこの点から見直してみる必要もあると考えた。

そこで、昭和55年度は、「つまづきの発見」をベースに、児童が受身の学習から脱皮し、主体的に取り組む学習活動(生き生きとした学習参加)を旨として「学び方」に視点をあて、学び方の内容と指導方法について研究しようと、この課題を設定した。

これは、本校の指導法の改善を旨とする一つの課題である。

昭和55年度 現職教育全体構想 足利市立西小学校



(2) 現職教育の内容

「一人ひとりに学び方を身につけさせる」という学校課題を解決するために、教科領域をしぼって、算教科を中心として取り上げることにしたが、指導法の改善を旨とする立場から「共同研究(2)」を年間の研修(研究)内容とした。同一の立場から「共同研究(3)」をつけ加え、別の角度から「一人ひとりの学び方」にかかわる「共同研究(4)」を位置つけた。

「共同研究(1)」は、これらの内容の研究をすすめていくベースといえるものである。本校教育計画そのものの改善の問題である。生涯教育を指向した第2次西小学校教育計画(目標具現の見取図)を全教職員によって改善整備し、実践していくことが、本校教育の土台づくりと考え、これを、「共同研究(1)」においた。

これらの共同研究を深めるために、先進校視察を取り上げ、日常の教育活動の中における研究を大事にしていこうと、「個人研究」を位置つけた。

(3) 共同研究と個人研究との関連

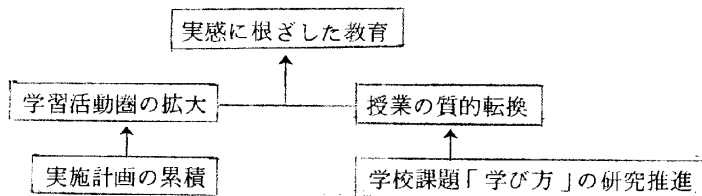
何をするにも2人以上集まるといことは、それだけ条件が付加される。まして、全校的な共同研究が計画されると、その制約条件が大きくなる。そこで、本校では、共同研究と関連づけながら、自由な立場でいつでもどこでもできる個人研究を重視する方向をとりつつある。

共同研究は、事前研究、授業研究、事後研究(全体討議、ブロックによる討議)と深められていくが、これが日常の教育活動で生かされ、さらにそこからまた、個々の教師の創意と工夫が生み出され、より充実した指導へと発展しなければならない。研究のための研究に終わってしまっはならない。この意味から、本校では、「参加の喜び」を体得させる日常の教育活動そのものを個人研究の視点とした。

(4) 個人研究

7. 実感に根ざした教育の実践(学習活動圏の拡大)

学習活動圏拡大については、本校の特色ある教育計画の内容と方法である。さらに多様な面からの実践を試みる。具体的には「実感に根ざした教育実施計画(学習活動圏拡大)案」の累積を旨とする。これは、教育計画における教育活動(方法)改善に関する視点から考え出された内容である。わたしたちは、実感に根ざした教育は、この学習活動圏の拡大と授業の質的転換によって行われるものであることを確認した。



イ. 実践試案の作成

お互いに常に深い思索と実践をとおして教育感覚をみがき、自らを高めなければならない。そのためには、まず事実を正確にとらえ、それを全体との関連において構造化してみることから始めなければならない。言いかえれば、「為すべきこと」と「為し得ること」を明確に弁

別することである。

本年度は、さらに、これを観点別に全教職員がそれぞれ「実践試案」として作成し、第3学期はじめに提出し、その中の共通項については、全体協議を行い、次年度の教育計画策定の基本資料とする。

これは、教職員の自己啓発と経営参加の二つの効果を期待しての試みである。（教育計画・西小学校教育改善の方向より）

ウ. 一人一研究（担任として係としての創意ある実践の試みの総括）

教師一人ひとりが主体的に課題（学校課題をより具体化したもの）を持ち、創意し実践することも望ましい現職教育と考えた。つまり、日常の教育実践の中で考え工夫し、実証することである。さらに、これを発表し合うことによってお互いにみがき合うことができたらと考えた。今年度が第2年次である。

3. 個人研究（一人一研究）の実際

(1) 現職教育年間計画に位置づけた個人研究

6月 —— 個人研究課題

- ・ 学校課題にそった個人研究の課題について整理し、各自研究の方向をさらに焦点化する。（全職員で話し合う。）

6月～11月 —— 研究テーマを決め、各自研究をすすめる。

11月 —— 各自研究のまとめをする。→印刷する。

- ・ 用紙は更紙左ふくろとじ
- ・ 形式は自由
- ・ 全職員が持ちより全職員で製本する。（これも現職教育・実技研修である。）

12月 —— 第1回発表会 8名 1人15分（発表と質疑）

- ・ 各自設定した課題にそっての研究を互いに発表し合い、相互研究に資する。

1月 —— 第2回発表会 8名 1人15分（発表と質疑） 指導講評（校長、教頭）

(2) 個人研究 —— その集録（第2集）から

ア. 校長の「前書き」個人研究第2集刊行によせて

教育観の深まり ——

「しっかり教材研究をして、本気になって指導にとりくむことが、教師にとって、最も重要なことである。」という言葉に耳をすることがある。 ——

——— 確かに そうだろう。

しかし、それだけでは不十分である。「教材研究と指導」という教育実践の繰り返しの中で、一人ひとりの教師に期待できるものは、どちらかといえば、「指導方法論」に偏りすぎた「教育技術の向上」ということだけに、とどまってしまうのではないだろうか。

——— それだけでよいのだろうか。

世は、まさに情報化社会、様々な教育情報が奔流のごとく、学校に流れ込む昨今である。道

を誤ってはならない。雑然とした教育情報の中から、より本質的なものを見抜き、教育の方向を定めていく確かな選択眼を、われわれは持たなければならないのではあるまいか ——。

「より確かな選択眼」とは何か。——— それこそ、その教師の哲学であり、洗練された教育観でなければならない。その「教育観の深まり」については、それが個性的なものであるだけに、様々な条件があるだろう。

しかし、多くの人々に共通していることは、「思索と実践」の二点に集約できるのではないかと思われる。

思索と実践 ———

思索に偏りすぎれば空理空論に流れ、実践のみに偏れば、主体性なき、その場かぎりの、単なる行動として終わってしまうにちがいない。思索と実践、実践と思索……この積み上げこそ、教師にとって、最も重要な姿勢なのではあるまいか。思索なき実践は、方向性を誤り、実践なき思索には、深まりのないことを厳しく知りたいものだ。

そして、さらに、教育は、子どものためにだけあるものではない。教師自らのためのものもあることを確認しておきたい。すなわち「弟子を教え導くことは、師、自ら学ぶことである」という師弟同行の教育は、この基盤の上のみ、成り立つものであったはずだ。

思索とは ——— 「書くこと」と「読むこと」である。

大樹のもとに坐して瞑想することも思索であるならば、先哲のごとく、散歩を深い思索の条件とすることもあるだろう。しかし、わたしたち教育実践の現場に立つものの思索とは何か—

それは、まず第一に「書くこと」である。書くことを通して深められる思索である。自ら考えたことを、あるいは、自ら実践したことを、一つの主題にそって文章化してみることである。雑然として、受けとめていた教育情報を、その人なりに、自分自身のものとして、自分の言葉でまとめてみることだ。いわゆる、内面的に統一・整理してみることである。

第二に「読むこと」である。書くことだけに、とどまってはならない。様々な教育情報を、自己の内面に統一するということは、自らの知識の不足に気づくことであり、研究の方向や自分自身の課題の全体構造を、より明らかにすることである。すなわち、書くことにより、問題の構造が明らかになり、主体的な握が可能になるのである。——— しかし、この段階にとどまってはならない。自分のレベルにとどまってはならないのだ。さらに、すぐれた本を読むことだ。先人・先輩の言に、謙虚に耳を傾けることだ。

飛躍の契機が、必ずや、そこに現れてくるにちがいない。

「実践 → 書く → 読む → 実践」という教師のライフスタイルの中の重要な段階である「書く」ことの試み ——— ここに「個人研究」の最も重要な意義があることを記して「まえがき」としたい。

イ. 研究主題一覧（発表順による — あらかじめ抽選により決めた）

- ① 友だちと遊べない児童の指導
- ② 1年生の友達意識について
- ③ 鉛筆削りに関する試み

- ④ 理科における指導法の一工夫 ～特に実験器具の扱いを中心に～
- ⑤ 日常生活につながるような体育指導のあり方
- ⑥ 本校児童の水泳能力（泳力）についての考察
- ⑦ テストバッテリー実施結果の考察と活用
- ⑧ 理科の評価・一試案（行動評価の実際）
- ⑨ 家庭科における課題意識をもたせるための導入の工夫（特に本時の導入について）
- ⑩ 感動を素直に表現する「詩」の指導
- ⑪ 本校児童の体力について
- ⑫ ボタンかけの指導（特殊学級における日常生活指導）
- ⑬ 家庭学習について
- ⑭ 樹木から学ぶ
- ⑮ 子どもは学校から帰ってからどんな生活をしているか
- ⑯ 「みんなの時間」の効果的な活用のあり方を求めて ～主に制作活動を中心として～

☒ 個人研究の実践例

現職教育全体構想の確定とその内容についてふれてきたが、ここでは個人研究特に一人一研究についてその実践のいくつかをあげてみた。

I 鉛筆削りについての試み

- 1 主題設定の理由
 - 2 用具について
- } 略

3 鉛筆削りをはじめるまえに

- (1) どんな用具で鉛筆を削っているかという質問に殆ど全員が削り器を使っているということであるが、1名だけ包丁で削ってもらうという児童がいた。削り器でも電動が70%、手廻しが28%、残りはミの鉛筆削りを使用している。小刀は、私が使用しているのを見慣れてはいるが実際に使用している児童はいない。
- (2) 削るための準備段階として木よりも削りやすく、しかも鉛筆に似ているものとしてクレヨンを選んだ。クレヨンは木目はなく、やわらかい。書く用具としては鉛筆に最も近い。
 - クレヨンを削らせる

削る抵抗がほとんどないのであるから、けがはおそくないだろうという予想で、とにかく小刀を握らせてみることにする。小刀の背をクレヨンに当てて削ろうとしている子もいる。力を入れすぎでポキポキ折ってしまう子。左利きの子は困った顔をしている。

左手の親指を小刀のみねにかけて作業する子は、わずか2名であった。

先をとがらせて「色えんぴつができた。」と喜ぶ子もいた。削ってからの後始末、グループ毎の小刀のあつめ方などにも問題を残した。
 - ホットドックの棒を削らせる

ホットドックの棒は、油がしみ込んでいるので削り易いし木であるから芯がないだけで、

鉛筆削りの練習には最適である。給食に出たホットドックの棒をあつめ、日陰でよく乾燥させておく。

割り箸もどうかと考えてみたが、あまり上質な木は使っていないので削るのに抵抗があるので取り止めた。

4 鉛筆削り指導記録

(1) 刃物の仲間をあつめる

こども達の生活や経験を掘りおこす意味で、刃物の種類とその役目について学習する。

切る時に使う道具 はさみ ナイフ ほうちゅう

ここで特にナイフの仲間について出たのが くだものナイフ カッターナイフ
切り出し小刀の名前は全く出なかった。

“けがを絶対させてはいけない”これが私の強い願いであった。

けが人が出たら工作の授業はゼロである。その上危険をおかしての小刀を使う鉛筆削りに、批難の声も集中するにちがいない。このことを考えて、何度か断念しようとした。

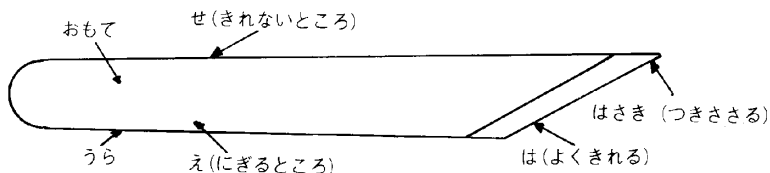
しかし、運動会の練習時や交通指導時、こども達に、物事に真剣にとり組む態度をうかがうことができなかった。学校という温室の中にも、緊迫感に溢れる授業があってもよいのではないかと考えて、こども達に小刀を握らせることに踏み切った。

(2) 鉛筆削りの授業

個人の準備 更紙 $\frac{1}{4}$ 小刀 鉛筆2本

ア. 小刀の各個所の名称を知らせる。

指示する時に便利のように、名称をきちんとおぼえさせる。



イ. みんなの約束

クラス全員が守らなければならない約束を板書する。

- 約束 1. 刃先を相手に向けない
2. もらう時は柄から
3. あるきまわらない
4. 机の中ほどに置く
5. いたずら、おしゃべりはしない
6. ふりまわさない ふざけない

ウ. 小刀の受け渡し方の練習

はじめ、並んでいる子ども同志で受け渡しの練習をして、つぎに、班長からの受け渡しの練習

エ. 削りかすの始末

- かならず紙の上で削り、カスはフッと吹きとばさないこと
- 鉛筆の芯は有害であること
- 紙に包んで捨てること

後始末をきちんとすることを約束させる。

オ. 鉛筆削り

- 全体指導………全員に小刀を持たせ、安全な削り方を指導する。

鉛筆は左手でにぎる。

親指と人さし指は鉛筆の削るところをつまむ。

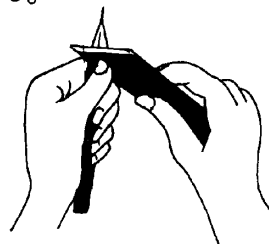
残りの3本指は離しても鉛筆は落ちない。

小刀は右手で握る。あまり力を入れなくてよい。

削る時は両手とも身体の外から離さない。

小刀を押すのは左手の親指、鉛筆を動かすのは左手の4本指

つまり左手の親指を小刀のみねに置き、残りの4本の指で鉛筆を手前に引くという基礎練習である。



最近の鉛筆は、木質も向上し、削りやすくするために油もしみ込ませてある。木目もきれいに通っているのであまり抵抗を感じない。

- 削る………太くなった鉛筆を各自削らせる。

説明どおりになかなか指は動かないが、真剣である。静まり返って誰もしゃべる者がいない。

巡視すると、刃を持っている子、左手の親指を使わない子、長く削りすぎてしまった子、電動削りとは全く違ったさまざまな顔を持った鉛筆ができた。

すぐ書いてみる。書けた／書けた／自分で削った鉛筆で書いたはじめての文字。芯の先はゴツゴツしているけれどもそんなことは気にしない。こどもは、大事な鉛筆をていねいに筆入れにしまい込んだ。(物を大切にすることは、こんな事にも関係があるのか)

- 後始末

削りかすを見ると、うまく削れた子の削りくずは長く、くるくる丸まっている。包んでごみ箱へ捨てさせる。

5 反 省

子どもは、必要以上の力を入れて押し切ろうとしている。

小刀で切る条件として ① 小刀を斜めに当てる。

② ゆっくり動かす。

③ 小刀がよく切れること

この三条件がそろえば、無理な力を入れなくてもうまく切れる。

直接切ることに関係ないが、小刀の置き方、渡し方、管理等はすべて安全に結びつくことであり、これらの条件が満たされれば、児童の小刀による鉛筆削りは可能となるであろう。

II 「みんなの時間」の効果的な活用の有り方を求めて

——— 主に制作を中心として ———

1 基本的な考え方（本校教育計画をうけて）

- (1) 「みんなの時間」を「実感に根ざした教育」の実現をめざす、特に直接的な教育の場としてとらえ、主として体験的な学習を行う。
- (2) 教師の意図的な指導の場とする。
- (3) 「みんなの時間」の活動は、(1)(2)をふまえた創意ある活動にしたい。

2 内容 略

3 学年としての運用の考え方

ゆとりの時間とは言っても、年間計画もないものであるから一週間一週間の予定を考えることは、他教科に比べ苦痛が大となる可能性を痛感した。

そこで、できればひとつの工夫されたテーマが少なくとも1カ月～2カ月にわたって活用できる物が最適であると考えた。しかも、その材料がその後、次の活動を生み出せるものでなければならぬ。

次に、本校教育計画「みんなの時間」全体計画の内容(2)の豊かな人間関係を育てる等の観点から、協力学習の場があり、個人思考の場が共にあるものが望ましいこと。季節感、文化、生産（体験を通して）を通じて、子どもたちの工夫や研究の場が十分に期待できるものでなければならぬ。そして、制作品で十分に喜んで遊ぶことができ、更に手づくりの味が発展し、家庭でも遊びの中に取り入れられるものとして考えてみた。

4 制作活動

- (1) 制作品 竹馬づくり
- (2) ねらい 身近にある自然物を利用し、楽しく遊べる道具を自分の手でつくる体験をさせる。
- (3) 制作させようとした意図 (調査人員 78名)
 - (ア) 市販（プラスチック製）の竹馬を持っている者 34名（44%）
 - (イ) 自作（父母との共作） " 2名（3%）
 - (ウ) 竹馬にのれる者（市販・自作問わず） 29名（37%）

※ 学年として、これらの実態から実際に本物の竹を使い制作を試みた。

(4) 指導の実際

- (ア) 4人グループ編成（男・女別）混性になると女子の活動がにぶる。
- (イ) 竹（ふしのそろっている物を購入）◎300×20組＝6,000円
- (ウ) 足のせ台・・・昔のテント支柱を利用
- (エ) しばるひも・・・松崎さんからいただいた綿ひも
- (オ) 各班ナター丁・・・図工室から

※ 教師側の準備と指導

竹の購入・足かけ台の丸太（切るが、半分に割るのは児童）

ひも・ナタの使い方の諸注意

(カ) 制作にかかった時間 約2週 4時間
遊びに費した時間 約4週 8時間

(5) 制作から気づいた現代の子ども

- (ア) 夢中で制作する。— 夢中でのろうとする。
- (イ) ひもでしっかりと足かけを固定できるようしなければならない。
- (ウ) 足の裏、指のまたにすぐ“まめ”ができてしまう。

※ 指のまたが我々の少年時代とちがって開かない。— くつ下と足袋のちがい？

- (エ) 教えなくても4人が交代制で補助をし合う。
- (オ) のれる者(37%)から(92%)になった。

(6) 子どもたちの感想から(主なもの)

- ・ 刃物は正しく使えば、こわくないと思った。
- ◎ ひもをきつくしばることは、むずかしいものだと感じた。
- ◎ 大変だったが、できた時は今までにないほどうれしかった。
- ◎ 協力したり注意し合ったり、みんなでひとつの仕事をやる大変さや楽しさがわかった。
- ・ 自然物を利用した手作りの楽しさを覚えた。
- ◎ 自分たちの身のまわりには、たくさんの遊びの材料があると思った。
- ・ 竹馬がこんなに楽しいとは思わなかった。
- ◎ 次の木曜日がとても楽しみだった。
- ◎ お金で買わなくても、工夫すれば、楽しい遊びがあることがわかった。
- ・ 切る、結ぶ、どれも初めての体験。
- ◎ ひとつの道具をみんなで作り遊んだことがなかったので、とても楽しくうれしかった。
- ◎ 自分で作った物にのれるすばらしさがわかった。

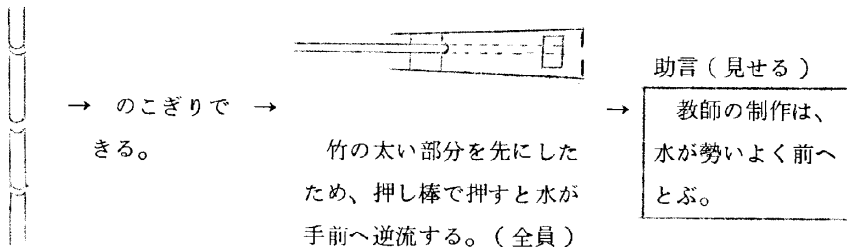
(7) 竹馬製作後、家での手づくり作品

1. 弓矢 2. 竹コップ 3. 紙でっぼう 4. 竹げた 5. 竹とんぼ 6. 水でっぼう
7. すぎでっぼう 8. 植木ばち 9. けん玉 10. ひしゃく 11. ようじ入れ 12. へび

◎ 竹馬を解体し、水鉄ぼうの制作

1. 準備物 のこぎり、きり、布、細ひも(購入120円)
2. 子どもたちのつまづき

※ 完成品を見せて自由制作(個人)



全員で考えたが、
→ 2時間かかって逆流 → 気づいた者が1名
もうこの竹は使え
ないから、竹をかえ → てほしい。

助言(考えさせる)
竹の太さなりに広がる、柔軟性に富んだ材質を使用すれば……。

3日後に、ウレタン・
→ スポンジやポリフォーム → が使われだした。
みんなの時間に
プールで水のかけ → っこ遊びをする。
よくとばないも
のは、かけられて
ばかりいる。

よく飛ぶ物への
→ 工夫がさかんに行
われた。

3 水でっぽうを制作した後の子どもの感想

- ◎ 竹馬をこわすのがもったいなかった。
- ◎ 一度使用した竹でも、次の遊び道具ができることを知った。
- ◎ 竹の切り方を失敗したことから、竹の性質(自然物の利用と形の工夫)をおもいらされた。
 - ・ 結び方を工夫しないので、布が何回もとれてしまったが、最後は、糸の片方を回定物にしっぱったので、両手を使え、成功した。
- ◎ 糸をしばるのに、歯が利用できるのには驚いた。
 - ・ 昔の人は、何でも考えて作り出すのだなあと思った。
- ◎ 大昔の人になったような気がして楽しかった。
 - ・ 店で買わなくても、手作りの方がおもしろいことに気づいた。
- ◎ 何度も何度も失敗したが、最後まであきらめなかったのは初めてだ。
 - ・ 穴の大きさと飛ぶ勢いに大きな関係があることがよくわかった。
- ◎ 小さい穴からあければさらに大きくできるのに、いきなり大きな穴をあけてしまったので、大失敗した。やる前によく考えたい。
 - ・ のこぎりやなたが使えるようになった。
 - ・ 苦労したもののほど完成した後の喜びが大きいことがわかった。

◎ 水鉄ぼうをさらに細く切り、竹とんぼ制作へ(個人)

準備物 ナタ・切り出しナイフ・サンドペーパー等

5 まとめとして

手づくりに対する子どもの意欲にはすさまじいものがある。が、現在の子どもたちは市販の完成物しか見ていない。したがって、竹馬づくりや水鉄ぼうづくりにおいても、ひもや糸をきつくしばることさえできないのが現状である。

ある者はひもの片方を歯でおさえて巻くことを知り、感動している。一方、全力でゆわえたはずの足かけは体重を支えるまでにはきつくしばられていない。よって、一歩進むやいなや、もろくも落ちてしまう。

失敗をくり返ししながら一つの物を完成させた喜びは貴重である。

失敗が工夫や思考を産み出す因をなしていることも事実である。

物が豊富な現代社会に生まれ育った子どもたちには、失敗すればまた新しい物からつくり直すしか考えるすべがない。しかし、失敗しても材料がないことがわかれば、真剣にその原因を追求しそれに見合うものへと目を向けようとする。そして、一日でも二日でも考え、スポンジやウレタンの機能に着眼するように、子どもたち（人間）は、次々と新しい発見をしていく。

これらの事実から、改めて教育を見直す時、子どもたちへの物やヒント（助言や眼のつけどころ）の与えすぎが思考へのさまたげになる場面が多々あるのではなからうかとさえ思えるようになってきた。

6 今後の研究として

- 学年にそって長期展望の上にしたった「みんなの時間」の活用
- 1年間継続でき、しかも、季節感に乏しい現代っ子に十分季節を味わわせることのできるものの制作と遊びの開発。

Ⅲ 樹木から学ぶ

1 はじめに

この研究は県小理のテーマである「自然に働きかけ豊かな発想を生かしながら学びとる理科学習」を受けて、足小教研として研究しているものを本校なりに取り入れて研究したもので、主に6年生を対象としたものである。

理科指導は、何と言っても事物、現象をよく見るということから始まり、そこから子どもたちの疑問を引き出し、それらなるべく直接経験させながら解決していくのが理想である。

そこで、子ども達を可能な限り自然に近づけ、自然へ働きかけられるようにしてやるのが教師の大切な役割であると考えた。

以上のようなことから、自然の対象をまず自分達の身の回りにある校庭の樹木にし、それらへの働きかけを試みてみた。

2 研究の内容および方法

- (1) 校庭にあるすべての樹木名を調べ、その分布図を作った。

表記は牧野植物図鑑により、和名で統一し属名または学名などが知られているものは()書きとした。

- (2) 樹木と教科書との関連、主に理科、国語においてどの単元に出てくるかを調べた。

- (3) 樹木を子ども達がどれくらい知っているか調査した。1組は授業で扱った外に樹木調べをさせ、2組は授業でしか扱えなかったため、それらの比較もしてみた。

- (4) 授業への取り入れ — 指導事例 —

授業では次のようにして2回ほど校庭の樹木を扱った。

- 6月 — 植物の成長と日光との関係
- 9月 — おしべ、めしべのはたらき

このうち指導事例としてのせるのは、6月に行った植物の成長と日光との関係である。

3 調査結果 2の(2)(3)から

◎ 本校にある樹木名および教科書との関連と、児童が知っている割合 55. 11. 22 現在
(6年生)

	樹木名	本数	教科書との関連	1組 (%)	2組 (%)
1	サンゴジュ	35		100	55
2	イブキ(タマ)	33		37	59
3	ツツジ	30	3-国(上)つり橋わたれ(数字は学年)	100	98
4	ジンチョウゲ	25	⑥-理(上)植物の成長と日光	95	82
5	ソメイヨシノ	22	1-理・国 3-理 ⑥-国・理	100	100
6	カイヅカイブキ	17		9	0
7	アオキ	9	1-理 3-理	72	36
8	シラカシ	9	1-理 おちばあつめ 1-国	88	80
9	トチノキ	9	⑥-理(上)植物の成長と日光	100	95
10	マサキ	多		51	20
11	ハクチョウゲ	多		12	14
12	クスノキ	8		100	100
13	ワジュロ	7		51	14
14	イチョウ	6	3-理 ⑥-理おしべめしべのはたらき	100	100
15	カイドウ	5		47	9
16	ヒイラギ	5		86	91
17	ヤマザクラ	5		98	98
18	ケヤキ	4	⑥-理 植物の成長と日光	100	80
19	コムラサキシキブ	4		72	52
20	レンギョウ	3		65	7
21	アケボノスギ (メタセコイア)	3	⑥-理 植物の成長と日光	86	89
22	フジ	3	6-国(上) 短歌	95	93
23	アカマツ	3	⑥-理 5-国(下) 2-国(下)	100	100
24	キリ	3	1-理 おちばあつめ	37	11
25	ナンテン	3		56	16
26	ツバキ	3	3-理 4-国(上)	100	100
27	バラ	3	3-理 1-国(下)	100	100
28	ホザキシモツケ	2		28	5
29	キミガヨラン	2		16	50
30	メウリカエデ	2	1-理 おちばあつめ	93	75
31	ポプラ	2	1-理 5-国(下)	84	68

32	ゲッケイジュ	2		58	16
33	ヒマラヤスギ	2		86	25
34	シロヤマブキ	1		21	52
35	キンモクセイ	1		98	93
36	エノキ	1		67	48
37	ハクウンボク	1		9	2
38	カラコギカエデ	1	1ー理 3ー理 はのしげるころ	93	75
39	ミツデカエデ	1	1ー理 3ー理 はのしげるころ	93	75
40	ユキヤナギ	1		77	43
41	コデマリ	1		9	18
42	ニワウメ	1		37	25
43	キョウチクトウ	1		53	23
44	ムクゲ	1		2	5
45	ツジミバナ	1		60	48
46	シンパク	1		2	0
47	カキ	1	1ー理 4ー国(下) 6ー国(下)	100	100
48	ヤツデ	1	1ー国	84	82
49	ヤマモミジ	1	1ー理 おちばあつめ	100	100
50	ツゲ	1		37	14
51	トウヒ	1		7	5
52	クワ	1	3ー理 めばえのころ	88	76
53	カラタチ	1	3ー理 めばえのころ	88	86

⑥ー理 教科書には出てこないが、その単元で扱った樹木（6月と9月）

〈本校にない木〉 モクレン（1ー理） スダジイ（1ー理） ユズリハ（6ー国）
 シラカバ（3ー国） ホウ（3ー国(出)） ライラック（6ー国） レモン（4ー国(出)）
 クリ（6ー国） ナツミカン（4ー国(出)） リンゴ（4ー国(出)） ミカン（3ー国(下)）
 セモモ（5ー国） ウルシ（5ー国(下)） ヤシ（2ー国(出)） モミの木（6ー国）

4 授業について 一 略

5 まとめと今後の課題

- ・ 本校には53種の樹木があり、最も多いのはサンゴジュである。めずらしいものとしては、アケボノスギ（メタセコイア）生きている化石、シロヤマブキ（実がなる）などである。
- ・ 子どもの実態調査からもわかるように、授業で取り扱われたものについては、知っている割合がいずれも80%を越えている。そして、1組と2組を比較して見ると、1組の方がはるかに知っている割合が高くなっている。これはその時の指導のしかた、または、その後の子どもたちへの投げかけが問題になることはたしかである。

子ども達を自然へ近づかせ、働きかけさせるには、やはり教師がまずやってみて、場を作っ

てやる努力が必要である。

- 樹木を理科として学ぶことから樹木をかわいがる情操面へと広げていき、植物の好きな子をふやしていきたい。
- 樹木分布図は今後の緑化計画などに活用し、教科書に出ている樹木はやがて植えられることを望む。(樹木分布図 一略)



4. まとめと今後の課題 (個人研究 特に一人一研究)

今年度は、この研究に全職員参加の立場で取り組んで第2年めである。

研究主題一覧とその実践例にみるように、研究が個々ばらばらのもののように見えるが、本校の教育計画をふまえたものとして評価し得るものとなってきたように思う。着眼大局着手小局のたとえのように、現職教育の基本方針に基づく全体構想をふまえた研究がさらに上積みされたように思う。個人研究が着々と日常化の方向で動いている一つのあかしと言えないだろうか。

一つの研究をまとめるということは大へんなことであるが、加えてそれを集録としてまとめ、全職員のものとしていったところにも一人一研究のみのがあったように思う。

この研究の過程(組織化の中)で、わたしたちは繰り返し「生涯教育を指向した西小学校教育計画」の考え方を確かめることができたし、現職教育全体構想における各内容のかかわりを意識できるようになったと思う。

今後の課題としては

- (1) 個人研究の課題は、学校課題と完全に同一化することはあり得ないことだし、またそうすべきものでもないと思う。しかし、より学校課題に接近させるようにしていきたいものである。
 - (2) この研究をきっかけに、さらに学習指導改善に努めていきたい。
 - (3) そのために、研究を日常化していきたい。
 - (4) 個人研究のために使える教師自身のゆとりの時間をできるだけ確保していきたい。
 - (5) 課題設定については、もっと早く(できれば4月～5月中に)したい。
 - (6) 視聴覚教材の活用などにも研究のメスを入れていきたい。
- ◎ 個人研究は、現職教育全体構想の一部に位置づけられているものではあるが、これをさらに拡大化の方向で推進していきたいと思う。

この記録は、本校現職教育係が現職教育記録をもとにまとめたものである。